◎東京都品川区

【人　　口】　350,246 人　　【面　　積】　22.72ｋ㎡　　【一般会計】　1,378.85 億円

◆視察事項「教育改革『プラン 21』について」

本市における小中一貫教育に向けた調査の参考とするため、品川区の教育改革「プラン 21」に掲げる小中一貫教育に関する事項について、小中一貫校伊藤学園を訪問し、同校での取り組みの視察を行った。

・品川区の小中一貫教育

品川区では、学校教育の質的向上を図り、公立学校の復権を果たすため、平成 15 年に国から「構造改革特別区域研究開発学校設置事業」（教育課程の弾力化）の認定を受けた。品川区では、既に先進的な教育改革を「プラン 21」に基づいて推進していたが、教育特区としてこれまでの施策をより発展させ、義務教育９年間を一貫して展開する教育課程（小中一貫教育要領）を策定するなど、既成の概念にとらわれない新たな教育を積極的に推進。

平成 18 年度から区立の全小中学校で小中一貫教育を実施し、小中一貫教育では、小学校６年・中学校３年という壁を取り払い、系統的・継続的な教育活動を行っている。子どもの心や身体の発達を踏まえ、４・３・２制を採用し、低学団（１～４年生）では基礎・基本の定着、中学団（５～７年生）は基礎・基本の徹底に重点を置いた指導、高学団（８～９年生）は教科、内容の選択幅を増やし、生徒の個性・能力を十分に伸ばす指導を展開。

１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生	７年生	８年生	９年生
低学団				中学団			高学団	
基礎・基本の定着 （読み・書き・計算の習得）				基礎・基本の徹底			自学自習の重視	

品川区では、施設一体型一貫校と施設分離型連携校の２つのタイプで小中一貫教育を実施しており、施設一体型一貫校は、平成 25 年度までに６校開校予定。

(1) 大崎地区･････日野学園（H18 開校（第二日野小・日野中の統合））
(2) 大井地区･････伊藤学園（H19 開校（原小・伊藤中の統合））
(3) 八潮地区･････八潮学園（H20 開校（八潮学園小・八潮学園中の統合））
(4) 荏原西地区･･･荏原平塚学園（H22 開校（平塚小・荏原平塚中の統合））
(5) 品川地区･････品川学園（H23 開校（品川小・城南中の統合））
(6) 荏原東地区･･･豊葉の杜学園（H25 開校予定（杜松小･大間窪小･荏原第三中・荏原第四中の統合））

・小中一貫校伊藤学園の概要

法的には原小学校と伊藤中学校の２校が併存しているが、教員は、管理職も含め全員が両校を兼務する発令を受け、品川区の管理運営規則によって校名を「伊藤学園」とし、小学校でも中学校でもない「小中一貫校」であることを全面に打ち出している。なお、伊藤学園の校名は、初代内閣総理大臣 伊藤博文の屋敷の門が伊藤中学校の校門（伊藤門）として使われたことから由来している。

(1) 施設の概要
　平成 19 年４月竣工、地上５階 地下２階建て、敷地面積 11,475.20 ㎡
(2) 児童生徒数：1,221 名（平成 22 年度）
　６年生以下は各学年概ね 90～110 名程度、７年生以上は各学年約 180 名程度
(3) 学級数：６年生以下は各学年３学級、７年生以上は各学年５学級

⇒　７年生以上は、他の連携校からの入学者があるため、生徒数、学級数が増加

・特色ある主な教育活動

(1) 授業形態：４年生以下は 45 分授業、週 25 時間～28 時間、５年生以上は 50 分授業、週 29 時間
　⇒　・基礎学力の定着と発展的な学習の実践　・学力向上の徹底

(2) ５年生から全教科で教科担任制の導入
　⇒　・専門性を生かした充実した授業　・少人数による習熟度別指導（算数・数学等で実施）

(3) 全学年で市民科の実施
　⇒　・「道徳」、「特別活動」及び「総合学習」の時間を統合した品川区独自の教科「市民科」の授業を実施し、５領域 15 能力を培い着実に「生きる力」を育む

(4) １年生から英語学習を系統的に実施
　⇒　・「コミュニケーション能力」や「書く力」の充実　・英語科学習への円滑な接続

(5) 異学年間の活発な交流活動
　⇒　・交流授業、全校朝礼、交流給食、運動会、学芸発表会等

(6) ４年生以上の全学年で宿泊体験学習の実施
　⇒　・５年生と８年生、４年生と７年生は一緒に宿泊体験を行って互いに力を磨き合う

(7) ５年生からの部活動
　⇒　・通常は中学校から本格的に行う部活動を５年生から実施することにより、体力が向上
　　伊藤学園は、品川区や東京都の大会でも上位入賞が多い。

(8) 開閉ドーム付温水プールで年間を通じて水泳指導の実施
　⇒　・４年生以下は全員、５年生以上は部活動等で実践
　　温水プールは、授業時間外は一般に開放

・委員の考察

● 視察前の認識として、小中一貫校は単純に経費節減のため親子別居を二世帯にするというイメージでしたが、小中学校という壁を取り払い３段階で義務教育９年間での確かな学力を育むということであった。品川区では、施設一体型と分離型連携校の２つのタイプの一貫教育を行っており、施設を新しくしたり教員の配置、連携に気を配っておられた。教師が多忙になったり、５、６、７年生の中弛みが出るなどデメリットもあるようだが、それ以上に上級、下級生が互いの姿を見て育ち、教員が同じ校舎で９年間かけて目配りができる等のメリットもあるようである。

● ①社会の変化に主体的に対応し、品川区の教員、公立学校の質を向上させる改革、②学校の主体性、自律性の発揮と学校を支える教育委員会のサポート体制の充実、③学校、家庭、地域社会との実質的な連携を充実する教育の推進、④品川区の「第三次長期基本計画」に位置づけた計画的・段階的な改革の４つのコンセプトに沿って、小中のＰＴＡや校長会・副校長会の代表、学識経験者等のメンバーで組織されるプラン 21 推進委員会を中心に小中一貫教育等、さまざまな教育改革に取り組んでいる。

● 併設型の一貫校では確かに効果は上がるものと思えるが、連携型の場合はどうであろうか、目的をはっきりしなければならないであろう。

● 品川方式は平成 18 年度からの試みであり、９年生の効果はあと４年待たねばならず、果たして思惑どおりの成果が出るか期待したい。

● 品川区でも併設型一貫校が大多数であり、面積的にはわが市が圧倒的に広く連携型一貫校の成果が出ている学校を参考にした方がよりわが市に取り組みやすいのではないか。

● 併設型の一貫校の成果は私立の小中学校に多く、このことから公立の小中学校もそれだけの効果を

期待し取り組むのであろうが、そもそも私立の学校は生徒が選びあるいは学校が生徒を選んで通学しているのであり、公立が私立の出された効果を期待するには多少無理があろう。

- 小中の施設が一体型となっているので、小学校、中学校の連携がスムーズに取れている。
- 小中一貫教育を進めていく上で教職員の意識改革が必要。また、教職員が多忙になっているようだ。
- 多忙で部活が大変であり、家庭学習の定着の必要性を感じた。また、９年制による中だるみや、６～７年生の段差の問題もあるように感じた。
- 品川区は、教育特区の認定を受け、特色ある小中一貫教育を区内全域で一体型、連携型で実施しているが、今後の成果がどうなるのか？東広島のような地方都市に合うのかが未知数である。2007 年開校の校舎であり、校内は開放的で機能も充実している。本市も学校施設の整備等で参考にできるところが多くあった。
- 品川区では区を挙げて一貫校を推進しており、義務教育を小中に分けず９年間で卒業するスタンスを掲げていた。説明を聞く限りでは理想的に思えたが、中学から入学してくる生徒もあり、教員の連携によって小学校からレベルの均一化を図っておられるようだが、教員の負担は想像以上にあると思われた。